

青年期女子における自我同一性と自己隠蔽の関連

A relationship between identity and self-concealment of female adolescents.

臨床心理学研究科 臨床心理学専攻

1000 - 120705 戸塚 なつみ

I. 問題と目的

青年期は、これまで形成されてきた自我同一性をさらにより高次なものに再構成する時期であるといえる。Erikson.E.H.(1959;小此木, 1973)によれば、青年期は、急速な身体的成長とそれにともない性器的成熟が起こるため、それ以前に頼っていた不变性(sameness)と連續性(continuity)が再び問題になると述べている。

青年期における自我同一性形成において、重要な他者との関係性、特に、青年にとって横の関係である友人関係は、個と個の深い付き合いを求める関係性であり、自我同一性を形成するための不可欠な土壌である(杉村, 2008)。しかし、現代の青年の友人関係の在り方は変化している。小塩(1998)は、現代青年の友人関係の特徴について「広く浅い付き合い方」を見出している。その背景には、友人関係における「拒否不安」、「疎外不安」、「不調和不安」(松田, 2007)や、他者に対する「親密欲求」と「不可侵欲求」(西園, 2011), 肛門期的観点から自己の露出願望とその露出不安があるという理解(北山, 2011)から、人は他者との関係の中で、相反する心性を同時にもつことが推測される。また、現代の青年患者は不安や葛藤を心の内に保持し、主観的に悩むのではなく、自傷行為や暴力などの行動で表出していることが指摘されており(成田, 2012), このことから現代の青年期の心性の特徴として、自己の内部にある、不快な感情や体験への対処が、本来内部にもっていたものとは違う形で表出されている可能性が考えられる。このような過程があるとすると、自己の内部にある不快なものを表出する困難さが存在することも考えられる。

自己隠蔽とは、「否定的(negative)もしくは嫌悪的(distressing)と感じられる個人的な情報を他者から積極的に隠蔽する傾向」と定義されているパーソナリティ特性である(Larson&Chastain, 1990 ; 河野, 1998)。Larson&Chastain(1990)は、ほとんどの人は、他者に打ち明けていない自分自身についての情報をもち、その情報は様々な範囲があると述べ、人にとって自己隠蔽は馴染みのある経験とした。そして、自己隠蔽は、自己開示とは異なることが明らかにされ、身体的症状や精神的症状と関連があることが示されており(Larson&Chastain, 1990), 日本においても同様の結果が明らかにされている(河野, 1998)。

先行研究から、心理的問題、主観的健康度、対人関係との関連について、自己隠蔽は人

の心身の健康に悪影響を及ぼす要因ということが示唆されている。しかしながら、人が他者に対して秘密を持つこと、他者から不快な感情や経験を隠すことは、対人関係において自他境界の明確化や(小此木, 1980), 対人関係の維持、自尊心を守るための意図的な行動でもあるという指摘から(原・山田・樋口, 2013), 自己隠蔽は、人の心身の健康に悪影響を及ぼすだけではないことが推測できる。

本研究では、自己隠蔽の肯定的な意味を検討することを目的とし、以下2点の仮説を立てた。

1. 自己隠蔽は自我同一性に対して肯定的な関連がある。
2. 主観的健康と自己隠蔽の関連の間に自我同一性が媒介し、主観的健康の程度を緩和する。

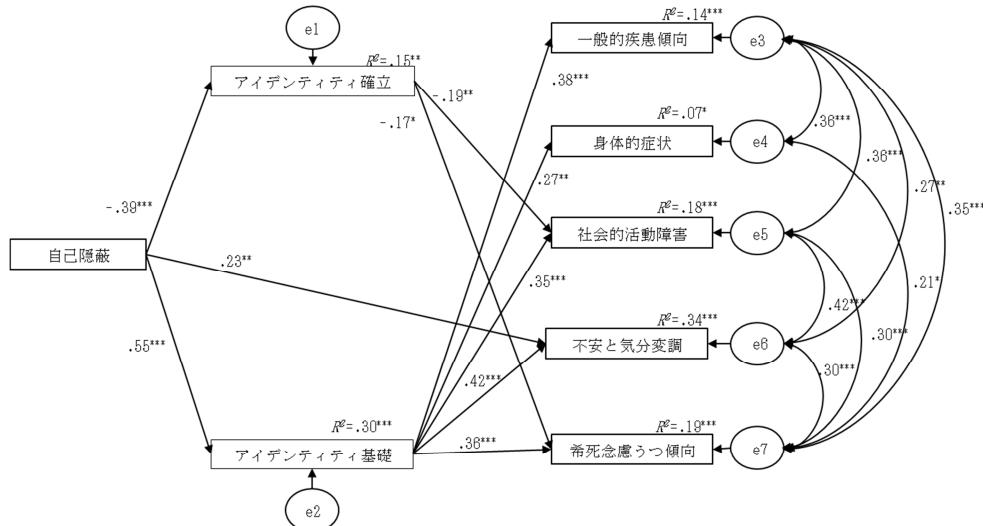
II.方 法

調査対象は関東圏内に通う女子大学生で、平成25年10月に質問紙調査を実施した。回答者数137名のうち有効回答者数は129名であった(平均年齢19.17歳, $SD=.067$)。質問紙は1)日本版GHQ30(中川・大坊, 1985), 2)アイデンティティ尺度(下山, 1992), 3)日本語版自己隠蔽尺度(河野, 1998)の3つで構成されている。

III.結 果

日本語版自己隠蔽尺度、アイデンティティ尺度、日本版GHQ30の各因子間で相関係数を算出した。その結果、自己隠蔽と「アイデンティティの確立」との間で、有意な負の相関が示された($r=-.39, p<.01$)。また、自己隠蔽と「アイデンティティの基礎」との間で、有意な正の相関が示された($r=.55, p<.01$)。そして、自己隠蔽と「GHQ30全体合計」との間で、有意な正の相関がみられた($r=.41, p<.01$)。自己隠蔽と日本版GHQ30各下位因子間では、自己隠蔽と「一般疾患的傾向」($r=.19, p<.05$)、自己隠蔽と「身体的症状」($r=.21, p<.05$)、自己隠蔽と「睡眠障害」($r=.29, p<.01$)、自己隠蔽と「社会的活動障害」($r=.27, p<.01$)、自己隠蔽と「不安と気分変調」($r=.46, p<.01$)、自己隠蔽と「希死念慮うつ傾向」($r=.24, p<.01$)とGHQ30の各下位因子間すべてに、有意な正の相関が示された。この結果は、先行研究と同様に、自己隠蔽は心身の健康を増悪させる傾向を示したため、本研究の仮説1は支持されなかった。

次に、自己隠蔽と主観的健康との間に自我同一性が媒介し得るか、共分散構造分析で検討した(Figure 1)。その結果、自己隠蔽は自我同一性を低下させ、それにともない、主観的健康も増悪するということが考えられた。よって本研究の仮説2は支持されなかった。



$\chi^2=10.98(p<\text{n.s.}), df=10, GFI=.979, AGFI=.925, CFI=.997, RMSEA=.028$

Figure 1 自我同一性を媒介とした自己隠蔽と主観的健康の関連

IV. 考 察

本研究の結果、自己隠蔽と自我同一性の関連は認められたが、自己隠蔽は自我同一性に対して肯定的な影響をもたらすものではないことが考えられた。また、先行研究と同様に、自己隠蔽は主観的健康、特に「不安と気分変調」の増悪に直接的に関連することや、自己隠蔽が自我同一性を媒介して主観的健康へ影響を及ぼすということが示された。

これらのことから、自己隠蔽は、人が隠している情報が否定的または嫌悪的だということだけではなく、「隠している」という意識そのものも不安などの情緒面を増悪させる傾向が考えられた。また、青年期における自己隠蔽は自我同一性の程度を低下させることによって、主観的健康をも低下させる可能性も見出された。

また、個人が否定的または嫌悪的だと感じる体験や情報を他者から隠すということは、自己の二重性を招いていると考えられ、自己の不变性と連續性という感覚の取得問題に繋がることが推測される。しかしながら、青年期において、自己隠蔽が自我同一性に影響を与えることは避け難いことなのかもしれない。なぜならば、Erikson E.H. (1959; 小此木, 1973)は、青年期において子ども時代の危機の多くと改めて戦う必要があると述べているからである。青年期では、「自分とは」という課題に取り組む際、自己の不变性と連續性を求め、過去の不快な体験や危機が、呼び起こされることが推測される。今後の課題として、心理発達過程と自己隠蔽の関連を検討することで、人が自己隠蔽をする意味の理解を深められると考えられる。